

フォーレ(Messe Basse)

フォーレ(1845～1924)は、スペインに近い南仏のパミエに生まれました。幼小の頃より音楽的な才能を発揮し、9才にして古典宗教音楽学校に入学しました。ここで、グレゴリオ聖歌をはじめ、優れた教会音楽を学び、サン＝サーンスにピアノを師事しました。また、サン＝サーンスを通じ古典の巨匠や当時活躍していたワーグナー、リストに至る広範囲の音楽に接しました。

卒業後、ノートルダム教会やサン・ジュールビースのオルガニスト及びマドレーヌ聖堂の合唱長として奉職し、1905年には、パリ音楽院の院長に就任しました。ここでフランス印象派をうち立てたラヴェル、ドビッシー等を教授しました。この意味ではフォーレはフランス音楽史上ロマン派と印象派の橋渡しの作曲家であったと言えます。

作品は歌曲や室内楽が中心ですが「レクイエム」をはじめとして「ラシーヌ讃歌」(Messe Basse) (小ミサ) 等作曲し、宗教音楽史の中でも大きな位置を占めています。

小ミサはフォーレの作曲活動の中で叙情性と気品のあふれる作風の確立した時期に書かれたものです。

1881年初稿をA・メサジェとの合作で書かれましたが第3稿ではフォーレがメサジェ作曲の部分を除いて現型である 1Kyrie eleison 2Sanctus 3Benedictus 4Agnus Dei が完成しました。フォーレの作風である叙情性は「旋律＝和声」という独特の作法に依っています。和音は単に旋律を追うだけでなく、旋律を和音の中に溶け込ませ全体の雰囲気を作り出すという作曲法は小ミサにも生かされています。美しく気品のあるメロディーは聴く人を清らかに敬虔な世界に誘うことでしょう。

増田 順平

1933年11月2日山形県に生まれ、東京芸術大学声学科卒業。声音を渡辺高之助氏、指揮を山田一雄氏に師事。東京混声合唱団、日本合唱協会のコンサートマスター、指揮者等を経て現在日本合唱協会常任指揮者を務める。アマチュア合唱団の指導にも力を注ぎ活躍中。合唱の編曲も数多く、編曲集「からたちの花」は特に好評を得ている。

《増田氏編曲の演奏曲》

今日、私たちが演奏する曲は、増田先生の手による編曲が多いことにお付けのことと思います。

第1ステージの「日本の歌」では「浜辺のうた」を格調高く、ポピュラーな「夏の思い出」は水芭蕉のかれんさを表わしたような柔かい編曲になっています。「げんげ花」は日本古謡の単調な旋律をモチーフにして品のある曲に仕上げられています。

第2ステージの「世界の歌」では「ローレライ」と「お空に月が」を特徴的な和音を使って幻想的な曲に仕上げられています。「オーラリー」は旋律を生かしながら素朴な雰囲気のある曲に、「なつかしのヴェージュニア」では動きのある巧みな編曲が成されています。

第3ステージのフォーレの「Messa Basse」は、本来「女性独唱、女性二重唱オルガン付」の小ミサ曲ですが、本日演奏するのは、増田先生により「混声四部合唱、オルガン付」に編曲されたものです。原曲の良さを生かし、また違った味わいを加えた曲と言えます。

第4ステージは、混声合唱曲集『コーラスの旅路』から構成されています。わらべうたの「ずいずいづっころぼし」「かごめかごめ／あんたがたどこさ」は奇抜な編曲により、リズム感のある楽しい曲になっています。「おぼろ月夜」は優しい雰囲気の中に春の薫りを感じさせ、また「椰子の実」は藤村の詩心を蘇みがえらせて、独唱とは一味違った感動を与えることでしょう。「花の街」もポピュラーな曲ですが、明るく躍動感あふれ「夕やけ小やけ」では馴染み深い曲が情感豊かに描き出されています。

子供の頃より馴れ親しんだ曲を、増田先生の編曲を通して味わいを一層深めることができるでしょう。幼い日々を思い出しながら、ごゆっくりお楽しみ下さい。

